中野市立南宮中学校　学校だより
南宮の里
令和7年12月18日
No,4
HP　Facebook
随時更新していますのでご覧ください。

人権感覚は磨き続けるもの～後期人権教育月間の学びから～

10月27日（月）から11月28日（金）まで後期人権教育月間として、各学年で学習をしてきました。月間の導入として、学校長から「命」という話がありました。また、各学年で人権に関して学習を進めてきました。人権感覚はよく鉄球に例えられ「磨き続けなければさびてしまう」と言われます。月間は終わりましたが、学校生活の中で常に生徒も職員も人権感覚を磨き続けていきます。

校長講話

【校長講話】　「命」

今日は問題からスタートします。

Q この数字は何を表しているでしょう？　・中1　5億4600万　・中2　5億8800万　・中3　6億3000万

（ヒントは回がつきます。6億3000万回。1分間隣の人と相談する）

正解は…生まれてから心臓がドクンドクンと動いている回数です。どうしてこの数値なのか？　中3の皆さんを例にとって説明します。個人差はありますが、人の心臓は平均すると1分間に 80 回くらい動きます。

1時間（60 分）だと　80（回）×60（分）＝4800 回

1日（24 時間）だと　4800（回）×24（時間）＝115,200 回

1年（365 日）だと　115,200（回）×365（日）＝4204 万8千　回

中3（15 歳）だと　4204 万8千（回）×15（年）＝6億 3072 万　回

ちなみに私だとおよそ 26億回近く動いています。そう思うと、自分の心臓に「本当にお疲れ様。命をありがとう」という気持ちになります。

今日は「命」の話をします。2つ目の問題です。”命は「　　」（な）もの”　皆さんだったら、ここに何を入れますか？（ちょっと考えてみてください）

ここにこんな言葉を入れた一人の女の子がいます。小学校4年生　宮越由貴奈さん　「電池みたい」　命は電池みたいなもの

由貴奈さんはどんな子なのか？　お母さんの言葉を紹介します。

『5歳のとき、神経芽細胞腫（しんけいがさいぼうしゅ）と診断された由貴奈は、11歳で亡くなりました。由貴奈は、5年半もの間、入退院を繰り返し、何度にもわたる手術や苦しい治療を受けました。この詩を書いた頃、テレビで流れるニュースと言えば、いじめだとか自殺だとかが多く、同じ頃、病院では，一緒に入院していた友達が何人か亡くなりました。生きたくても生きられない友達がいるのに自殺だなんて・・・そんな感じでした。

それにちょうど院内学級で電池の勉強をしたばかりだったそうです。由貴奈がなぜこの詩を書いたのか、本当の理由は分かりません。自分の死を覚悟していたのかもしれませんが、怖くて聞けませんでした。この詩を書いた4か月後に亡くなりましたが、これに書いたとおり充分精一杯生きました。書くことがそんなに得意でない娘のこの「命」という詩は11年という短いけれど凝縮した人生の中で得た勉強の成果ではないかと思います。』

宮越由貴奈さんは小児がんのため、長野県安曇野市にある県立こども病院に長く入院していました。病院の中に「院内学級」と呼ばれる教室があり、理科で電池の勉強をしたときに「命」という詩を書きました。それを紹介します。（右下）

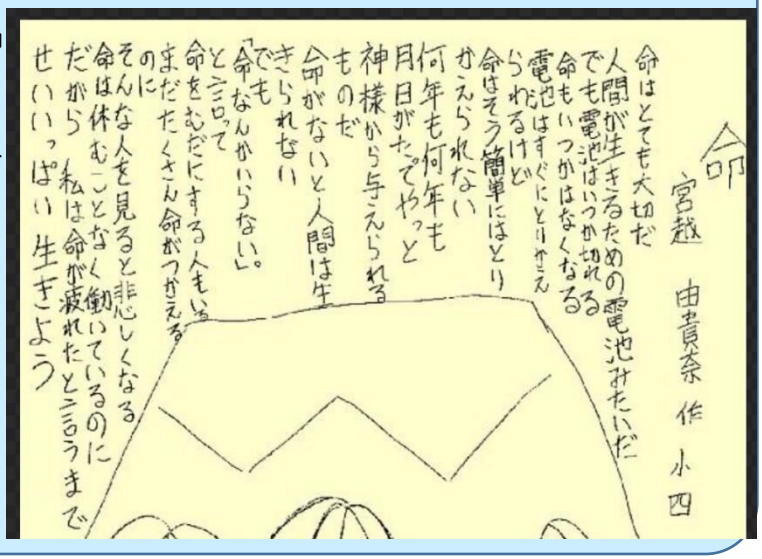
私はこの詩から、「由貴奈さんの精一杯生きたい、どうかあなたも精一杯生きて」というメッセージが伝わってくるように感じます。

今日はどうして命の話をしたのかと言うと、10月 27 日～11 月 28 日は後期人権教育月間です。人権＝すべての人が幸せに生きるために持っている権利、について学びます。それは自分や他の人の「命を大切に考える」ことでもあります。413 名…昨年一年間に自ら命を絶った全国の小中高生の人数です。きっと、本当につらくて、悲しくて、苦しかったことでしょう。でも、自ら命を絶つ前に、誰かに相談してほしいと思います。一緒に悩み少しずつできることを探してくれる人は必ずいます。

どうか宮越由貴奈さんの「精一杯生きたい、どうかあなたも精一杯生きて」というメッセージを忘れないでください。

最後です。「命」…この漢字の本来の成り立ちは違うけれど、この字をこのように解釈した人がいます。

「命　→“人　一　叩”　ドクン、ドクン、ドクン　人の一叩きの連続が命」私も「その通りだな」と思います。本当に「私の心臓、26 億回動き続けてくれてありがとう」です。皆さんもどうかかけがえのない命を大切にしましょう。



後期人権教育月間における各学年の学び

＜１学年＞
　自分の中に差別意識があることに気づき「かわいそう」という感覚から、「共に生きていこう」とする心情への高まりを目指し学習に取り組みました。様々な人の生き方に触れることを通して、共感するとともに実践力につなげることを目指しました。
　具体的には、障がいのある方に対する差別について、読み物資料を読み、登場人物の心情に触れることを通して、障がいに対する理解を深め、共に生きていくインクルーシブな接し方、社会を目指していく力を育むことを目的として学習しました。

【生徒の感想から】※「実を結んださくらんぼの木」（自分の弟が特別支援学級に入級する兄の心情を追った話）を学習して
〇自分と違う、みんなと違う、でもそれは偏見だったり、思い込みをしてしまっていて、人には一人一人のペースがあるから、弟さんが生き生きと楽しめる場所があるんだなと知り安心したんだなと感じた。
〇人は一人だけでは生きていけないから、たがいに違うところを受け入れて生きていくことが大事だと知れた。
〇普通という言葉で人を簡単に分けることは決してできないことがわかった。一人一人のペースがあることが大切だと感じた。

＜２学年＞
　部落差別について学ぶ場面で、なぜ差別が起きたのか、なぜ差別は続いたのか、差別された人々はどう生きたのかを知り、現代にも残る部落差別の事例について考え合うことを通して、公平・公正に生きていこうとする力、また、様々な事象を多面的・多角的に考えられる力を育むことを目指しました。
　教科書「あけぼの」を用いて、部落差別の歴史について学習し、当時の人々の様子から差別に対して一人一人が考えを持ちました。また、現代の差別事例を知り、「なぜ、差別について学ぶことが自分たちには必要なのか」について考えを深めていきました。

【生徒の感想から】
〇住んでいる地域によって、対応の仕方を変えたり、誹謗中傷をしている人たちは、どんな気持ちで差別をしているのだろう。もし、被差別部落に住んでいるから当たり前と思っているなら、絶対にその考えを変えたほうがいいと思う。部落差別以外にも、ちょっとした発言でも思っていたよりも差別につながったりする発言はたくさんあることを知った。何気なく発言していることが差別につながっているから自分の発言には気をつけなくてはいけないし、部落差別の歴史や、今も差別されている人がいるということを学ばなければいけないと思った。

＜３学年＞
　現在の社会の中にある様々な差別について、「イマジネーション」（動画教材）を視聴し、自分たちの中にも差別意識があることを学びました。そして、現在も残る部落差別問題の一つである「結婚問題」を扱ったビデオ「私が歩んだ道～差別の中を生きて～」を視聴したり、読み物資料「ふたりの結婚」の登場人物の心情を考えたりすることを通して、部落差別が他人ごとではなく、自分自身にも関係があることを学び、これから生きていく上で何が大切なのか一人一人が考えることができました。

【生徒の感想から】
〇和男さんや祐子（結婚をしたい2人）も辛いけど、祐子さんの両親も、自分の娘と娘が愛している人を離れさせようとしたのは辛かったと思う。でも、時間をかけてゆっくりとそういった問題は消えていくと思う。なくすためには、出身で決めるのではなく、その人「自身」として考えていくことが大事だと思った。
〇結婚はどうしても周りから何かしら言われてしまう。ダメだと言われてもあきらめずに話し合うことが良いと思った。差別を受けてきたからこそ、相手を憎むのではなく、自分ができることをつくして説得するのが一番良いと思った。差別は色々な人達からの意見で生まれるから、差別を無くせるように周りの意見にとらわれずに、自分の意見をつらぬくことがお互い幸せな生き方だと思った。娘のためを思うなら、両親は結婚を認めるべきだと思った。この授業を通して、結婚差別を深く知ることができた。お互いの気持ちは理解できるけど、差別、周りからの目を関係なく支え合うべきだと思うことができた。周りの目にとらわれるべきではない。

かんてんぱぱ SBC こども音楽コンクール県大会優秀賞！
２年連続で長野県の代表として東日本優秀演奏発表会に出場します！

　１次審査を通過し、9月28日（日）に、長野市芸術館で行われた「かんてんぱぱ SBC こども音楽コンクール県大会」に出場し、優秀賞をいただきました。そして、その後行われた選考会にて南宮中合唱部が「東日本優秀演奏発表会」への出場を推薦されました。昨年度に続き2年連続の出場となりました。
　東京にあるパルテノン多摩のホールで、3年生との最後の演奏となる「にじのうた」を思う存分楽しみ、最高のハーモニーを響かせてきてください！

合唱部写真
※個人情報保護の観点から削除